

Niigata Association of Nursing Care Research

ニュースレター

第 5 号

第 4 回学術集会在開催されました！ テーマ：再発見！ 看護の力

第 4 回学術集会在を終えて

学術集会长 中村 悦子

平成 24 年 10 月 20 日(土)、第 4 回学術集会在を開催することができました。本大会のテーマは「再発見！看護の力」でした。心地よい風が頬をなで、秋日和の中、286 名の方にご参加いただき無事、成功裡に終了することができました。看護学校 3 校から学生の参加もあり、若いパワーも頂きました。午前是一般演題から始まり 7 演題の口演発表がありました。教育の場、臨床の場から、実践に根ざした問題提起があり、会場の参加者と活発な意見交換がなされました。示説発表は 11 演題でした。会場ではパネルとパネルの間に人の山ができ、対面でのやり取りがなされました。多くの看護の芽が、そこ、ここに在ることを実感いたしました。会場の一部では展示会や喫茶コーナーも設けられ、ひと時の楽しみもできたのではないかと考えております。午後からは特別講演「在宅ケアのつながる力ー『暮らしの保健室』開設で見えてきたことー」と題し、白十字訪問看護ステーション所長秋山正子先生をお迎え致しました。秋山先生自らの在宅での取り組みがVTRで流されると、会場全体がその画面に引き込まれ、感動の渦となりました。シンポジウムのテーマは「私たちが発揮している看護の力」でした。4名のシンポジストをお招きし、それぞれの立場で活動の実際をお話して頂きました。身近な仲間「看護の力」を改めて感じた充実した2時間でありました。看護を語ることによって、見落としていた看護の力の再発見につながったのではと思います。最後に、会員の皆様をはじめ、秋山先生、シンポジストの方々、座長、準備に当たられた方々、そして関係者の皆様に、ご支援とご協力を頂きましたことを心より感謝申し上げます。



特別講演

「在宅ケアのつながる力」

ー「暮らしの保健室」開設で見えてきたことー

講師：白十字訪問看護ステーション

秋山 正子先生

座長 中村 悦子

(新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科)

在宅看護、訪問看護師として活躍されている秋山正子先生をお迎え致しました。超高齢社会の中で、誰もが納得した生き方をし、穏やかな死を迎えることが今日のテーマとなっていること。質の高い End of Life Care を支えるには「医療と介護」の一体化が必要であること。訪問看護ステーションの役割は、急性期病院から地域に帰ってくる人々に、在宅での医療を提供するサービス機関として、また、入院しても短期間で在宅に戻れるよう、地域でのかかりつけ医師と協働し、ケアマネージャーや介護職の方とも協働しながら、地域の医療連携の調整役としての活動をしている、とその実際についてお話しされました。中でも、在宅での看取りについてNHK「プロフェSSIONAL仕事の流儀」で放映されたVTRでは、訪問看護師の活動の生の姿が伝えられました。「癌患者の長い旅路に何が必要か？」と問いながら、患者の自宅に足を運ばれる秋山先生の後ろ姿、患者に寄り添う先生その眼差しや表情が印象的でありました。「人生の最後を家で暮らしたい人を支える」には、地域での支援が必要です。生活を見守る視点、患者が自分でできることの幸福や喜びを支えること、そのときの患者の目の輝きを見失ってはならないという言葉が心に残りました。

「暮らしの保健室」開設に当たっては、スライド

を通してその活動の広さを知ることができました。暮らしの困りごと、健康、医療、介護の相談所など、地域の人々が気軽に利用できる場が「暮らしの保健室」です。看護職が地域住民を支えるネットワーク活動の中心にいて、その役割、機能の拡大に向けた未知なる挑戦が、秋山先生のエネルギッシュなパワーとともに私たちに勇気を与えたのではと思います。明日の看護に繋げていけたらと思います。

シンポジウム

「私たちが発揮している看護の力」

座長 小林 恵子

(新潟大学医学部保健学科)

シンポジウムは「私たちが発揮している看護の力」をテーマに、異なる分野で活躍されている 4 名からご報告をいただき、意見交換を行いました。

佐藤和泉さんからは「看護職副院長としての挑戦」と題して、新たな部門開設や病床管理の一元化に向けた実践例から、副院長であるからこそ発揮できる看護の力について力強い報告がありました。更科佳子さんからは、開業助産師としての豊富な体験をもとに「ひとりひとりに寄り添うケア」と題して、出産を自然の営みととらえ、その人らしさを追求した出産とはを改めて考えることができました。犬井智子さんは「在宅療養に向けた病棟看護師の役割」と題して、「こども病棟」に勤務する看護師として、子どもと家族に寄り添う看護師だからこそ感じ取れる、家族の気持ちの揺れや健康への配慮について報告いただきました。渡辺郁子さんからは町民の健康を守る保健師として、一人ひとりに寄り添い、人と人をつなぎ、町全体の取り組みに発展させていく過程とそれを実現する熱い思いを語っていただきました。

4 名のシンポジストの報告は、いずれも患者、家族、地域住民を主体に人々の力を信じて、看護職として発揮できる力を真っ直ぐに追求し続けている姿でした。同じ思いを持って参加された方々の背中を押すシンポジウムであったと実感しています。



～シンポジスト～

看護職副院長としての挑戦

副院長の立場 佐藤 和泉

(社会福祉法人新潟市社会事業協会 信楽園病院)

信楽園病院は、一般病床 337 床をもつ地域密着型の急性期病院である。今年度から DPC 対象病院に移行することを決定し、病院長は「医療の標準化の推進」と「外来シフトの推進」を目標に、医療の質の向上にむけて全職員が一体となって DPC に取り組み、DPC を通して業務改善を行うという方針を示した。

この病院組織の改革の時に、職員の最大数を占める看護職、最大部門である看護部のトップである看護部長を副院長にすることで、そのチーム力をもって全職員の意識改革ができると期待していた。

DPC 移行に伴い、新たな部門の開設が実現した。外来シフトをスムーズに実現するため「入院準備センター」を設置し、看護師長と看護師主任を配置、また標準化の推進に向け、「クリニカルパス専任看護師長」を配置し、看護部長室でその活動を支援する体制を整備した。看護師が不足しているにもかかわらず、要所、要所に看護職の長を配置し、「看護」を拡大していくことができたのは、看護部長という立場だけでは成し遂げることが難しいことであった。

もう一つは、病院経営上最も重要といわれる「病床管理」の一元化にむけた取り組みである。各病棟の病床状況を迅速に確実に把握するための連絡体制を整備し、空床の一元把握に努め、最大限の有効利用と、緊急入院の受け入れの円滑化を推進するなど、多面的に取り組みを始めてきている。このことは、当院が求める「地域住民に信頼される医療の提供」につながり、それが職員のやりがいとなって、結果として病院経営健全化に貢献することになる。

看護部長が副院長になるということは、病院経営や運営においては、看護職としての視点や特性を有効に生かしつつ、組織全体のより良い調整者であることが期待されている。そして、患者を中心に置いた各医療専門職の果たすべき責任と役割は、職種間が対等の立場で有効な協働と連携ができてこそ、良質な医療が保証できるもので、真のチーム医療を形にしていくためには、看護職副院長の立場は大きな意味を持つと考える。

ひとりひとりに寄り添うケア

助産院における助産師活動から

助産師の立場 更科 佳子

(みちつき助産院)

入院施設を持つ助産院は新潟県で 2 軒。そのうち

の 1 軒が当院である。助産院で出産を希望してこられる方は『自分の力で自然に出産したい』などといわれることが多い。しかし今、生活環境、食生活の変化などで自然に生む力は少しずつ退化？してきているようにも感じる。出産は自然な営みであり病気ではなく、本能とでも言うべき自然の力を十分に発揮できることが大事なことになる。妊娠中からそれに対応できるからだや気持ちを作っていたかくこと。そしてその力を発揮していただくために、私達はいつでも十分に寄り添い安心できる環境を作ることが重要になる。助産院は臨時応急の対応はできるものの、当然医療行為は認められていない。それこそ陣痛の痛みばかりは鎮痛剤を打つわけにはいかないし陣痛が弱いと促進剤などを使用できるわけでもない。五感をフルに活用して観察をし、その時に必要なケアや助産技術を選択し発揮すること。そばにいる、痛いところに手を当てる、温める、アロマなどの自然療法、室温、照明、家族の調整、適度な食事など。それこそが医療と匹敵するようなケアになりうる。またそのケアは援助者の一方的なものではなく、その人が心地よいと感じた方向へのケアでなければ意味がない。それが本能を突き動かし、お産を自然に進めてくれるケアにつながっている。その人が一番リラックスできる環境、そういう意味では自宅出産などまさに一番の環境といえる。いつもと変わらない日常生活を送ること。その人らしさを発揮してもらうこと。これは在宅看護にも通じることかもしれない。自分の力で多くの人から温かい支援を受けて出産したお母さんたちは輝いている。お母さんたちが『本当に幸せな出産だった』と思えること。それが家族への感謝や赤ちゃんへの愛情を生み子育てや家族を守る原動力になる。そういうお産になるようサポートしたい。私たちの行っているケアの力を感じると共に責任の重さを実感している。

在宅療養に向けた病棟看護師の役割

看護師の立場 犬井 智子

(新潟市民病院)

新潟市民病院の「こども病棟」は、急性期病院として平均在院日数 7 日、ベッド回転率 4.3 で、短期入院が多い中で、在宅療養に移行する子どもとその家族に退院支援を行っています。2011 年度に先天性的あるいは後天的疾患により経管栄養・気管切開・24 時間の人工呼吸器管理など医療ケアが必要で、合同カンファレンスを行い在宅医療に移行した事例は 3 例でした。こども病棟では継続受持ち看護師が中心となり、家族と医師・MSW・地域担当保健師や訪問看

護ステーションのスタッフと合同カンファレンスを行い「顔が見える」連携を図り、協働して退院支援を行っています。今回シンポジウムに参加し、より安全に子どもとその家族が在宅・地域で QOL を維持または高めながら生活できるための支援について、病棟看護師の役割とその関わり方について振り返り、私たちが発揮している「看護の力」を知ることができました。また、在宅医療では子どもと家族を中心として病院や施設と地域、職種を超えた繋がりを継続することが必要です。そのためには、私たちの「看護の力」を見つめ、現状に満足することなく持てる力を発揮して、より良い看護が提供できるように、子どもと家族に寄り添い向き合っていくことが重要であると再認識しました。一方、病棟看護師が地域連携を視野に、早期から退院支援・在宅療養に関わることで、急性期病棟であり、複数の看護師が関わる中で、いかにタイムリーに継続した看護・ケアを提供することができるかが今後の課題です。

今回の特別講演の秋山正子先生や、さまざまな立場で活躍し「看護の力」を発揮しているシンポジストの方、そして今回の学術集会に参加されたみなさんから、たくさんの看護の力と勇気をもらうことができましたことに感謝いたしますとともに、これからの看護に生かしていきたいと思ひます。



家族まるごと！地域まるごと！

～公的な保健師のする訪問から～

保健師の立場 渡辺 郁子

(聖籠町役場 保健福祉課)

近年、自治体の保健師は母子保健・成人保健・精神保健・介護など各論・業務ごとの専門性を強く求められ、また、市町村合併による業務の合理化も進められ、保健分野だけでなくあらゆる部署に分散配置されていく傾向にあります。しかし、やはり本来の保健師の専門性は、地区を担当し、生活・家族・地域を丸ごと見る「公衆衛生の視点」だと思います。

聖籠町では、昔から保健師の大先輩たちが、「住民 2,000～3,000 人に一人の保健師が必要」とずっと言い続け体制を作ってきてくれました。まるで、小学校のクラスに一人の担任の先生がいるように、基盤となるフィールドを持ち、その中で活動をするイメージです。事業化されている様々な家庭訪問があります。しかし、2 か月児の全数訪問でも、介護の相談でも、きっかけがあれば必ずその対象者だけでなく家族全員の様子をつかんでくることは、地区担当保健師の大きな役目になります。何もないうちから保健師につながるが「予防」への一歩になることもあるのです。また、行くことで潜在的な課題の掘り出しにつながることもあります。つまり、申請や訪問要請がなくても家庭訪問ができるのは、公的な保健師だからこそと言えますし、それが現代の複雑化した課題を持つ社会でも大きく期待されることではないでしょうか。このように家族単位の「点」が増えていくことで「面」になり、地域全体の様子・課題が見えてきます。それを集団化した住民と共に共有し、考える機会を持つことで、人と人がつながり合い、やがては地域全体の健康の底上げにつながると信じています。

各々の自治体の体制はありますが、災害時であろうと虐待や精神、その他どんな課題であっても、対象者その人だけではなく家族まるごと、赤ちゃんから高齢者まで全ての住民を対象として見ることで、そこから「予防」の視点で地域まるごとをみる活動を今後も続けていきたいと思えます。

口演発表

口演発表の座長を終えて

坪倉 繁美

(新潟県立看護大学看護学部看護学科)

座長を務めて強く印象に残ったことと手応えは、発表に続いての質疑応答場面です。日頃の看護活動の疑問や、発表に触発されて沸いた考えの深まりなどをぶつけ合い、活発に討論されたことです。これは将来の発展へとつながる興味深い場面でした。

発表は、母乳育児に関する事例、嚥下機能評価の実態、統合失調症の意思決定の構成要素、PCM 手法を用いた病棟の課題分析、プリセプター体制による教育システムの限界の提言など、幅広い内容であった。これらはいずれも看護職としての社会的使命や責任を考えたものであった。研究手法についても量的研究、質的研究と、内容においても研究手法においても多種多様なものであった。発表は、看護実践の日頃の振り返りと分析力を基礎にしながら俯瞰しま

とめられたものである。これは現場力を表出したものであり、専門家としての省察力も問われるものであるという感想を強く持った。発表には看護現場の改善につながるヒントが多数埋もれている。是非とも研究結果を活用していただき、それぞれの現場の力がますます向上することを祈ります。

口演発表を終えて

江平 利美

(医療法人立川メディカルセンター立川総合病院)

心臓・大血管手術における嚥下機能評価に関する調査について発表させていただきました。誤嚥により再挿管までに至った症例から、嚥下機能アセスメント不足が問題点に挙げたことが動機となり、研究を始めました。看護師の認識を把握し、経口摂取援助の実際を調査したところ、誤嚥事例の発生以降、看護師の危機意識が高まり、嚥下機能評価が実施されてきていることが明らかとなりました。しかし、知識や手技には看護師間で個人差があり、統一された安全な摂食・嚥下プロトコルの確立が必要であるという結果が得られました。現在、心臓・大血管手術患者の誤嚥危険因子を分析し、病態と関連づけたプロトコルを作成中です。

私は研究経験も少なく、今回の発表にあたり、学術集会長である中村悦子先生にご多忙中、論文の明快な構成や表記方法などをご指導いただき、研究をまとめることができました。学術集会では他病院の取り組みも学ぶことができ、今後の看護や病棟業務に活かしていきたいと思えます。



示説発表

示説発表の進行を終えて

宮山 浩子

(社会福祉法人長岡福祉協会小千谷さくら病院)

今年度の示説は 11 題の演題があり、質疑応答の既定の時間枠で活発に意見交換できるように、同じく示説発表進行担当の信楽園病院の米持妙子さんと進

参加者の声

め方の打ち合わせをしました。

進行係としては、提示されている研究ひとつひとつに焦点を当てたかったので、11 題を 2 グループに分け担当しました。研究者の方から研究の説明してもらいながら、参加者も自由に意見や質問ができるようにすすめました。過去 3 回の本集会と比べて参加者が非常に多く、また意見交換もフランクにかつ非常に活発であったように感じました。また、内容もテーマである「再発見！看護の力」に通じるもので、11 題全てに質問・意見があり、あつという間に与えられた質疑応答の時間の 30 分が過ぎました。発表者・参加者とも時間枠外でもまだまだ続く看護への思いを語り合っていたので、米持さんとの打ち合わせの際の不安だったことは解消されて、有意義に進行係をさせてもらったと感謝しています。

示説発表を終えて

野村 光江

(総合リハビリテーションセンターみどり病院)

7 月に看護研究発表の話を頂き、渡邊岸子先生にご指導を頂きながら、何とか研究を完成、発表する事が出来ました。私自身、研究＝難しいというイメージから、正直言って苦手意識もあり、さらに今回は提出までの期間が短く、初めは完成させられるのか不安でした。しかし、研究を進めていくにつれ、今、実際に行っている看護を振り返り、整理をし、形にすることが看護研究であり、日々実践している看護の中には色々な題材が転がっているのだと分かりました。当病院では看護業務の中でも、療養上の世話が多くを占めていますが、日々試行錯誤しながら患者様の状態に合わせた看護ケアを提供するよう心掛けています。今回の研究を通して、本来あるべき看護の基本を大切に、ケアを行っていきたくと改めて感じました。

最後に、このような場で発表する機会を与えて下さり、熱心に指導して下さい渡邊岸子先生に感謝致します。また、今回発表された研究すべてが非常に興味深く勉強になりました。職場は違っても看護師として頑張っている姿は、よい刺激となりました。



第 4 回学術集会に参加して

布川 貴弘

(医療法人白日会黒川病院)

新潟看護ケア研究学会の学術集会は今年で 4 回目を迎えた。私は第 2 回目の学術集会から参加しているが、学会で得た情報や会員の方々の何気ない会話の中から得たものが臨床の様々な場面で役立っていると感じている。さて、今回の学術集会は「再発見！看護の力」というテーマのもとで開催された。私は学術集会の準備段階から関わらせてもらったが、テーマを見た時に感じた思いは「自分はどれほど看護の力を意識しながら普段の業務に取り組んでいただろうか」というものだった。患者や家族との関わりの中で、または多職種との関わりの中でどれほど意識できていたか？そんな私にとって、発表された研究内容、秋山先生による特別講演、また様々な立場の看護職の方々によるシンポジウム、どれもこれも「看護の力」を再認識するための良い刺激剤となった。「自身が常に意識することで、発揮される看護の力は何倍にもなるだろう」常にこの思いを念頭に置き、今後の看護に取り組んでいきたいと感じている。

第 4 回学術集会に参加して

徳永 明佐美

(国際メディカル専門学校看護学科 3 年)

初めて学術集会に参加させていただき、口演を拝聴することはとても貴重な体験でした。実習でお世話になった指導者様の発表を聞いて、多忙な業務の中で、更に研究や看護の検討をされているのだという事に驚きました。内容も、実際に患者様へ接するケアから看護師が働く環境についてまで幅広く、しかし、その全てが患者様に寄与されるようにという思いのもとに会していることがわかり、学生である身でも、その思いを共有できるようにと大変興味深く勉強させていただきました。私自身、手術後から嚥下機能の低下を持った方のケースを振り返っている最中であり、特に江平利美さんの発表では、まさに実践の場において患者様と向き合い、看護の視点から安全な経口摂取を進める事の大切さについて語られる姿に、改めて、本来当たり前としている行動へ安全という視点を持って働きかける重要性を考えることができました。貴重な学びの場へ参加させていただき、本当にありがとうございました。

～事務局よりのお知らせ～

1. 「第 5 回学術集会」の郵送について

県内全ての病院、看護系大学・専門学校、訪問看護ステーション、保健所には郵送しております。配属部署にない場合は病院や施設の看護管理者にお問い合わせ下さい。

2. 学会ロゴマーク決定および HP へのアクセスについて

ロゴマークが決定しました。HP で確認ください。また、学会等の資料、入会用紙もダウンロード可能です。ご入会をお待ちしております。HP : <http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/>



第 4 回学術集会（平成 24 年 10 月 20 日開催） アンケート結果

学術集会参加者は 286 人（前々回 180 人，前回 226 人）であった。一般参加者は、前回とほぼ同様であるが、看護学生 171 人の参加があった。アンケート回答者 135 人、回収率 47%であった。参加者は増加しており、本学会への関心が高まりつつあるといえる。特に、看護学生の参加の増加は、今後の学会活動の発展につながるといえる。

プログラム全体、特別講演、シンポジウム、演題発表については、概ね良好な結果であった。全体の感想としては、「協働の実現や地域に根ざした看護の考え方に共感できる」「幅広い職種の人に参加してもらえる学会である」「毎年この学会を楽しみにしている」「学生の参加が多く活気がうまれる」「学生と意見交換できるとよい」等の感想が寄せられた。一方「現役看護職の参加が少なくて残念」「会員への還元がもっと充実されれば会員になりたい」という意見があった。現在、学術誌創刊の準備が進められていることから、会員への還元の一つの動きといえる。

特別講演については、「病院看護師には生活を見る視点が必要ということに刺激を受けた」「自分で決めて自分で行うという自分力は、入院中も大切である」「改めて急性期から在宅を見据えた患者との関わりが必要と感じた」「在宅医療の重要性を改めて確認した」「諦めずに取り組むこと、周囲と協力することの大切さが伝わった」「今後の看護への取り組みのモチベーションになった」等の多くの感想が述べられていた。

シンポジウムについては、「4 人のシンポジストの各々から看護の力について考えることができた」「地域との連携のヒントが見えてきた」「自分の領域以外の看護師の活躍を知るよい機会となった」「私もがんばろうと意欲がわいた」「これからの看護の原動力となる」、他には「シンポジスト間の意見交換があるとよい」等の感想があった。

一般演題は、「示説と口演の両方に参加できるように調整してほしい」「広く県内各施設からの発表があるとよい」との意見があった。示説には、「質疑応答だけでなく発表があるとよい」という意見があった。示説の発表の実施については、第 5 回学術集会で行う方向で検討を進めている。

最後に、看護学生からは、「どのような看護を行うとよいのか、患者のためになるのか、具体的に知ることができた」「様々な職種の方が医療・健康を支えているとわかった」「在宅医療にとっても興味を持った」「様々な事例から看護について学ぶことができた」「自分の仕事に誇りを持っている姿が素敵でした」「県内の看護の力のすごさを知ることができた」「現場で働く方々の素晴らしさを感じた」「現場の課題や臨床の実際を知ることができた」等の多くの感想が寄せられた。看護学生が学術集会の参加を通して多くのことを学んでいることがわかる内容であった。

第 5 回学術集会のご案内 日時：平成 25 年 10 月 19 日（土） 会場：新潟大学医学部保健学科

テーマ：家族と共にいのちを支えるケア

特別講演：どう生きたいかを支える、つなぐ看護 -在宅療養移行支援を体系化する-

講師：宇都宮 宏子氏（在宅ケア移行支援研究所 宇都宮宏子オフィス）

シンポジウム：その人らしく^{いのち}生命を輝かせるケアとは

学術集会長：井川 富美子（新潟市民病院副院長・看護部長）

編集後記

第 4 回の学術集会は、例年以上に学生参加が多く新しい機材の導入などこれまでにない取り組みも増えました。これからもっと会員が増えて、学会の参加者が多くなったら、「朱鷺メッセで学術集会を」なんて素敵なお内容になるでしょうか。広報担当：佐藤、成田、甲田、渡邊

新潟看護ケア研究学会 事務局

〒951-8518 新潟市中央区旭町通 2-746

新潟大学医学部保健学科内 関井研究室

Fax : 025 (227) 2637

Mail : a-sekii@clg.niigata-u.ac.jp

HP : <http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/>

Niigata Association of Nursing Care Research

ニュースレター

第 5 号 別刷

平成 24 年 10 月 20 日（土）11 時 30 分より、新潟大学医学部保健学科 D41 講義室において、平成 24 年度新潟看護ケア研究学会総会が開催された。なお、総会の開催に先立ち、会員数 269 名中 56 名（出席者;29 名、委任状;27 名）の出席者を得たことから、会則第 17 条 4 項に基づき会員の 10 分の 1 以上の出席があり、総会の成立を認められて議事が開かれた。総会では、平成 23 年度の事業内容および決算報告があり、賛成多数で承認された。次に平成 25 年度の事業計画案および予算案が審議された結果、下記に示した内容で賛成多数で承認された。

【報告事項】

I 平成 23 年度事業報告

1. 定例会議の開催

1) 評議員会

平成 23 年 8 月 30 日（火）

評議員 14 名出席

2) 学術集会・企画運営委員会

毎月 1 回開催

3) 編集委員会

学術集会企画・運営委員会と合同開催

4) その他

事務局会議（拡大）：2 回開催

2. 学術集会・総会の開催

平成 23 年 10 月 22 日（土）

3. 関係団体への後援依頼

1) 後援

新潟県、新潟市、社団法人新潟県看護協会、
新潟大学

2) 賛助

財団法人 協和会

4. 広報活動

ニュースレター第 4 号発行

学会用の HP 作成

<http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/>

学術集会のページ

<http://www.clg.niigata-u.ac.jp/~n-nursing-care/shukai.html>

5. 学会誌発行の準備

6. その他

会員名簿の管理

（会員数 269 名：平成 24 年 10 月現在）

【審議事項】

I. 平成 25 年度事業計画

1. 定例会議の開催

1) 評議員会：年 1 回開催

2) 企画運営委員会：月 1 回開催

3) 学術集会準備委員会：月 1 回開催

4) 編集委員会：1 回開催

5) 事務局会議：月 1 回開催

2. 第 5 回学術集会の開催

日程：平成 25 年 10 月 19 日（土）

場所：新潟大学医学部保健学科

テーマ：家族と共にいのちを支えるケア

学術集会長：井川 富美子

（新潟市民病院副院長・看護部長）

3. 第 5 回総会の開催

日時：平成 25 年 10 月 19 日（土）

場所：新潟大学医学部保健学科

4. 関係学術団体への後援依頼と連携

新潟県、新潟市、公益社団法人新潟県看護協会、
新潟大学（その他、関係学術団体）

5. 広報活動

ニュースレター 5 号の発行

HP の管理・運営

6. 公開講座の開催

7. 新潟看護ケア研究学会誌の発行

8. その他

抄録作成指導

新潟看護ケア研究学会平成 23 年度会計報告

収入

	H23 年度予算	決 算	内 訳
1.新潟看護ケア研究学会 H23 年度会費	780,000	▽626,000 (130 名)	1) 一般会費：5,000 円×118 名＝590,000 円 2) 院生： 3,000 円× 12 名＝36,000 円
2.新潟看護ケア研究学会 第 3 回学術集会参加費	390,000	△478,500 (226 名)	1) 一般会員：3,000 円×85 名＝ 225,000 円 2) 院生： 2,000 円× 11 名＝ 22,000 円 3) 非会員： 4,000 円× 39 名＝ 156,000 円 4) 学生： 500 円× 91 名＝ 45,500 円
3.H22 年度繰越金	80,000	△1,343,038	
4.寄附金	70,000	△70,000	協和会 70,000 円
5.雑収入	20,000	△25,000	広告費 25,000 円
	2,060,000	△2,542,538	

支出

	H23 年度予算	決 算	内 訳
1.新潟看護ケア研究学会 第 1 回学術集会費	970,000	388,955	1) 学会抄録 60,900 円 2) 会場・パネル借用費 70,635 円 3) 講師謝金 130,000 円 4) 接待費・花代 27,433 円 5) アルバイト費・その他 99,987 円
2.通信費	250,000	93,340	郵送料、葉書、振込用紙他
3 ニュースレター発行費	80,000	27,552	
4.印刷費	100,000	56,998	
5.事務諸経費	100,000	31,985	
6.会議費	100,000	13,902	
7.雑費	60,000	▲65,091	
8.学術誌創刊号発刊費	200,000	0	
9.活動予備費	200,000	0	
	2,060,000	△757,619	

(収入) 2,542,538 円 - (支出) 757,619 円 = (収支差額) 1,784,919 円

※平成 23 年度繰越

1,784,919 円

新潟看護ケア研究学会平成 25 年度予算

項 目	収 入	項 目	支 出
I 収入の部		II 支出の部	
1.会費収入	530,000	1.第 5 回学術集会開催費	885,000
1) 一般会員；5,000 円×100 名	500,000	1) 学会講演集	80,000
2) 大学院生；3,000 円×10 名	30,000	2) 会場借用料	50,000
2. 学会参加費収入	490,000	3) 学術集会運営費	270,000
1) 一般；3,000 円×100 名	300,000	4) パネル借用費	65,000
2) 大学院生；2,000 円×10 名	20,000	5) 講師謝金、旅費、接待費	390,000
3) 非会員；4,000 円×30 名	120,000	2.通信費	150,000
4) 学生；500 円×100 名	50,000	3.ニュースレター発行費	55,000
3.平成 24 年度繰越金	500,000	4.印刷費	80,000
4.寄附金	70,000	5.学術誌創刊号発刊費	200,000
5.雑収入(広告費等)	20,000	6.事務諸経費	50,000
		7.会議費	140,000
		8.活動予備費	80,000
収入合計	1,610,000	支出合計	1,610,000